

清流の国ぎふ芸術祭

第3回 ぎふ美術展

GIFU ART EXHIBITION

清流の国ぎふ芸術祭 第3回 ぎふ美術展

Gifu Land of Clear Waters Art Festival The 3rd Gifu Art Exhibition

2021

うまれる。あふれたす。

清流の国ぎふ芸術祭

第3回 ぎふ美術展

GIFU ART EXHIBITION

2021年8月7日(土)～8月19日(木)

主催 岐阜県・岐阜県美術館

(公財)岐阜県教育文化財団

目次

ごあいさつ	2
審査員講評	4
受賞作品	12
出品目録	26
関連プログラム	30
応募要項	38
応募状況	40
来場者アンケート	41
広報	42
記念品と作家紹介	45
運営体制	46
企画委員長総評	47

本県では、時代の変遷や表現の多様化に合わせ、2017年に、それまで69回の歴史を重ねた「岐阜県美術展」を「清流の国ぎふ芸術祭」とする改革を行いました。この芸術祭の3本柱の1つである「ぎふ美術展」は、県民の皆様に創作活動の成果を発表いただく公募展として、今回で3回目の開催を迎えることができました。

「ぎふ美術展」は、7部門14名の審査員に文化功労者や日本芸術院会員など我が国を代表する第一人者をお迎えするとともに、審査員が審査のみならず、作品講評会やトークイベントを通じて、直接、応募者・来場者と交流する機会を重視した魅力ある美術展として定着してきており、本県の芸術文化の振興に重要な役割を果たしています。

今回は、新型コロナウイルス感染症が広がる中にもかかわらず、県内外の5歳から92歳までの幅広い年代の皆様から過去最多となる991点のご応募をいただくことができました。また、アフター・コロナ社会を見据えた新たな鑑賞スタイルとして、デジタル技術を活用して、ご来場が困難な方にも展覧会をご覧いただける「3Dバーチャル美術展」を導入し、総来場者数は1万4千名超を数え、大成功を収めることができました。

これは、作品応募者、三輪嘉六氏をはじめとする審査員、神戸峰男委員長をはじめとする企画委員など関係者の皆様、「ぎふ美術展」を楽しみにしていただいている多くの皆様のおかげであり、深く感謝申し上げます。

今後も、関係者の皆様とともに様々な工夫を重ね、「ぎふ美術展」が、多くの皆様に親しまれ、豊かな芸術文化の創造に寄与する美術展となるよう努めてまいります。

岐阜県知事 古田 肇

「ぎふ美術展」は、「清流の国ぎふ芸術祭」の3本柱の一つとして再出発して以来、日常的に芸術活動に親しむ方々のニーズに合った公募展のあり方を探ってきました。

今回は、新型コロナウイルス感染症の拡大の中での開催という厳しい状況ではありましたが、芸術の灯を絶やさぬよう、準備段階から、徹底した感染防止対策を採りつつ、いち早くDXに着目して、3Dバーチャル美術展や、関連プログラム動画のWeb公開など、新たな取組みも実施いたしました。その結果、予定よりも会期が短くなったものの、11日間で8,000名近くの方にご来場いただき、また、3Dバーチャル美術展も大変ご好評いただいております。

今回、過去最多の991点のご応募をいただいたところですが、応募者の年齢層は幼児から90代まで非常に幅広く、また、障がいをお持ちの方も多数おられました。

当財団では、障がいのあるなしに関わらず、ともに文化芸術の創作活動ができる環境づくりに精力的に取り組んでおりますが、私共の事業に参加いただいた方々の応募も数多くあり、また、入選された方もおられるなど、これまでの取組みが着実に浸透し、実を結びつつあることを実感し、喜ばしく感じております。

県民の皆様とともに継続してきた取組みにより生み出された芸術・文化に参画する機運の高まりが、令和6年度に本県で開催される「第39回国民文化祭、第24回全国障害者芸術・文化祭」への着実な一歩につながると考えており、引き続き「ぎふ美術展」を通して、本県の芸術文化の発展に繋がるよう努めて参ります。

最後に、「第3回ぎふ美術展」の開催に当たり、格別のご支援を賜りました審査員の諸先生方、企画委員並びにご協力をいただきました関係各位に深く感謝申し上げます。

公益財団法人岐阜県教育文化財団 理事長 高木敏彦





田淵 俊夫
TABUCHI Toshio
日本画家
文化功労者
日本美術院理事長
東京藝術大学名誉教授

第3回ぎふ美術展の審査をしてみて、初めの印象は小品が多いが一生懸命描いているなということでした。審査が進むに従い夫々の作品が良く見えてくるのが楽しかったです。その中でぎふ美術展賞になった山元麻衣さんの作品には今までにない日本画の新しい表現を求める姿に感心しました。優秀賞の升野琴絵さんはモノクロームに近いぎりぎりの色調の中に人物を浮かび上がらせて美しく表現されており、又同じ優秀賞の佐藤正子さんの作品には難しい日本画技法の可能性を求めて色々試みている姿勢に好感を感じました。奨励賞の白木あやめさんの作品には風景を一度分解して再構成する表現に新鮮さを感じ、福田公美さんの作品には技術的にむずかしい日本画絵具を美しく表現しているし、林美都子さんの作品には平面的な表現に日本画の可能性を感じました。特に所久美子さんの作品には難しい水の表現を自分なりに表現した姿勢に好感をもちました。



野地 耕一郎
NOJI Koichiro
泉屋博古館東京館長

日本画とは何か?日本画とはどのような絵画なのか?それを一言で言うことはかなり難しい。材質は定常としているが、モチーフや主題は時代によって大きく変わってきたし、変わらざるを得ない運命をもっている。そんな「日本画」を牽引しつづけた高山辰雄氏は、「日本画は、時間を描く絵画なのです」と話された。「長い時間を憶い出すことが、私の日本画です」とも。
今回受賞作となった3点ともが、各各の作者にとっての記憶と、それを廻る生きた時間を主題にした作品だと知るにつけ、得心した次第です。3作とも画面の構成力、表現法に優れ甲乙つけ難く、順位をつけられないと思いました。そんな中で「The connection is lost」は、地塗りと図の関係性に新たな造形への焰を少しでも強く感じました。白描画ともいえそうな古様な佇まいも好ましいし、風景ではなく「山水」を想起させるところに、日本画の絵画としての希望があるように思います。



遠藤 彰子
ENDO Akiko
洋画家
武蔵野美術大学名誉教授
二紀会理事

入選作品は、笠井先生と共に検討を重ねながら選出させていただきました。集まった作品はバラエティに富んでおり、それぞれが自らの表現を突き詰めて制作している様子が、画面を通じて伝わってきました。選ばれた作品は、どれも力作だったと思います。
ぎふ美術展賞の林直樹氏の作品は、明暗のバランスが心地よく、モチーフをリズムよく配置することによって、上手く画面を構成していました。優秀賞の鈴木昌義氏の作品は、画面を小気味よく分割し、白黒と赤を効果的に配することによって、非言語的な人間の感情を表しているように感じられました。奨励賞の納義純氏の作品は、ノスタルジックな雰囲気と幻想性に魅力を感じました。

応募者全体のレベルは高く、誰が入選してもおかしくない状況でした。惜しくも選外となってしまった作品にも佳作は多数あったので、結果にかかわらずこれからも継続して挑戦してほしいと思います。
最後に、ぎふ美術展の発展によって、創作する喜びが多くの方に伝わることを心から願っております。まだしばらくは辛い日々が続きそうですが、お互いに頑張っていきましょう。



笠井 誠一
KASAI Seiichi
洋画家
愛知県立芸術大学名誉教授
立軌会同人

今展に際して初めて審査に参加させていただきました。選考に当たっては絵造りの基本的な力量と発想や表現力等も含めてすすめさせていただきました。
ぎふ美術展賞の「静物(テーブルの上)」(林直樹さん)は身辺にある器具を日常の目線で捉えながら緊密な画面構成の中に確りした表現力が評価されました。
優秀賞の「鉄の街」(鈴木昌義さん)は対象の抽象化を極限まですすめ、平面的な画面の構成と赤と黒の効果的な働きが目に残りました。
他にも様々な主題の多様な表現による数々の作品が見られました。



武田 厚
TAKEDA Atsushi
美術評論家
多摩美術大学客員教授

彫刻部門の応募点数は多くはなかったが、それぞれに独創的なアイデア=発想で自由にのびのび作られているのが良かった。技術的な問題に触れるとあれこれ難はあると思うが、大事なことは、何を表現したいのか、何をつくりたいのが率直に伝わってくるかどうかである。この度の審査で最も注視されたのはそういったところだったように思う。

とりわけ上位三名の方の受賞作品については、自身の思いを迷うことなく表現しようとした熱意が見えてくるものであった。思いの深さとそのまっすぐな姿勢が、結果としてユニークな造形を生み出したとも云える。ちなみに三名の受賞者は共に六十代、七十代の年齢を数える若くはない方々である。表現者にとって年の数は無縁とはいえ、そうしたものを一切感じさせない純なエネルギーの放出と凝結に、いわゆるモノづくりの魅力を素直に感じる。



三沢 厚彦
MISAWA Atsuhiko
彫刻家
武蔵野美術大学特任教授

今、現在、彫刻表現としてのカテゴリーやその考え方も随分と変化している。素材や形の問題を逸脱し、あるいは、思考性を持ち拡張しながら、ますます多様な様相を示している。そんな思いを感じながら、ぎふ美術展の彫刻部門の審査会場を訪れた。

作品は専門性の高いもの、技術云々より造形性を楽しんでいるもの、趣味性の高いものなど、様々なベクトルを持った作品が混在している。一つ一つ見ていくと、これらを審査するのは正直難しいと思った。何故ならば、個々の作品に作者のリアリティが内包されている。表現は先ずはリアリティを感じる事でしか成り立たないからだ。そう言った意味では全ての作品に実感がこもっている。

そんな中、ヒサオ・カメヤマさんの「ファンタジー」、樋口勝彦さんの「生命(いのち)の源流」、石田昇さんの「故郷～岐阜～」などが強く印象に残った。

特に、ある作品は、作者ご自身が息子さんの死に直面したことが作品を作る動機になったとお聞きました。その作品は地元の檜材による、地面からうのようにと発芽し、女性的な身体を纏って上昇する様な形であった。



隠崎 隆一
KAKUREZAKI Ryuichi
陶芸家

1000点近い出品作を前にして、7つの部門の幅広さに改めてこの美術展の奥行きを感じた。

工芸部門も同様に工芸の「粋」を考えさせられる作品群で工芸的な陶芸を生業にしている私にとって実に楽しい出品作群です。全体を拝見しどう捉えるか先ずはそこから入らなければならない、暫くは立ち止まってしまった。予想以上に出品者は工芸の視野を広く捉えているからである。それは彫刻?それは自由表現?...中々難しい判断を迫られた。

工芸は「用」というゴールをも想い描いてはいるが、色々な「ヨウ」を思わせた。出品作は技術や知識よりも想いや欲望、意思の強さが表れている。この度、ぎふ美術展賞に選ばれた陶で製作された浅野孝之さんの「食事中的転寝」は技術的完成度よりもその思想的な感性が自由に表現されている。岐阜県民主体ではあるが、芸術祭に相応しい一点です。



三輪 嘉六
MIWA Karoku
文化財学者
前九州国立博物館長

工芸部門での応募作品は89点、前回は上回る数であった。作品は多様性に富んだ内容で、改めて工芸とは何かという基本的な問題について視点を定めてみる必要があった。そして工芸分野の特性ともいえる染色、漆工、木工、和紙等は地域(岐阜)を語り得るものでもあるが、その類の作品に接することが殆どできなかった一抹のさびしさを感じた。

そんな中でぎふ美術展賞「食事中的転寝」は豊かな構想力を基に生まれた作品といえよう。全体に素直、特別な技巧を見ることは少ないが、ヒビの入った器の脆弱性が美の対象になり得ることを意識したところに特色がある。工芸に楽しさ、面白さを導入した作行である。

優秀賞の2点、「纏う」は丹念で繊細さが持味、造形力を発揮している。「池の中」は、水中生物を美しい表現力で覆い、豊かな心の包容力を感じる作品である。

そして、今後の制作に向けて期待感のあるものを奨励賞とした。





黒田 賢一
KURODA Kenichi

書家
日本芸術院会員
日展副理事長

第3回となるぎふ美術展は相当レベルが高いと伺って
おりましたので、大変楽しみにして審査に臨みました。
漢字、かな、篆刻、調和体と実にバラエティーに富ん
でいる中で、特に漢字作品は古典に立脚した造形と力強
く洗練された線情の豊かなものが数多くありました。
かな作品も、中細字作品を中心に、かなの美的要素の
一つである“遊絲連綿”と言われる連綿線を効果的に生か
した魅力的なものが目に止まりました。
ぎふ美術展賞の上籠鈍牛さんの「蟹眼」は金文ですばら
しく力強い筆力で表現され、特に白（余白）が実に美しく、
白と黒の芸術の極致を思わせ、最高賞にふさわしい傑作
でした。
優秀賞、奨励賞は、それぞれに練度の高い秀作を選出
しました。
これからも古典古筆を拠り所とし、普遍的な書美を追求
しながら、より個性豊かな作品が数多く寄せられることを
期待しています。



富田 淳
TOMITA Jun

東京国立博物館副館長

漢字・仮名・調和体・篆刻など各分野にわたる作品は、
古典に根差したものから、現代感覚を盛り込んだものまで、
いずれも表現の幅が広く、全体を通して充実した内容とな
っていました。審査にあたっては、書体や書風に偏ること
なく、それぞれの作品の持ち味を楽しみながら評価させ
ていただきました。
ぎふ美術展賞・上籠氏は、古代文字に現代感覚を盛り
込み、潤渇の対比から落款印章にいたるまで、大胆さの中
にも細やかな神経が行き届き見事。優秀賞・三間氏は、
重厚な線質と凛然とした書きぶりが味わい深く、日頃の弛
まぬ修練がしのばれます。奨励賞・石田氏は、独特な用
筆と清新な造形が実に美しく、響きの高い作風となってい
ます。
惜しくも選外となった作品の中にも秀作が多く、特に小
中学生の応募にはキラリと光る作品が少なからず見うけら
れました。今後の活躍を期待します。



伊藤 俊治
ITO Toshiharu

美術史家
東京藝術大学名誉教授

第3回ぎふ美術展の写真部門には、第1回作品数209
点、第2回作品数219点を超える233点の応募があった。
応募作品はいずれもレベルが高く、内容も祭りから動物ま
でヴァリエーションに富み、充実した審査にあたることが
できた。今回はコロナ時代を反映する作品が多いのでは
と想定していたが、ぎふ美術展賞の「上り・一番列車」や
優秀賞の「アクアリウム」など自然の厳しさや季節の繊細
な美しさを湛える作品が目についた。また奨励賞の「夕暮
の狩り(キツネ)」や「氷点下の朝」など、日々の何気ない
光景の中の偶発性を捉える写真も印象的だった。デジタル
写真からも優秀賞に老いの多様性を感じさせる「人生
100年時代」が選ばれた。デジタル時代になり、写真の記
録性も大きく変わろうとしてはいても、生活や風土、記憶
や経験に根差した写真の試みがこの岐阜の地に息づいて
いることを実感させる有意義な審査となった。



野村 佐紀子
NOMURA Sakiko

写真家

ぎふ美術展賞の「上り・一番列車」は、早朝の厳しい雪
の中を走る列車のヘッドライトが情緒的で、さらに車内の
2人が、この線路や停車する駅の事までも想像させます。
優秀賞の「アクアリウム」は、雪が凍るプロセスを非常に
デリケートな目で見つめて、丁寧美しく転換していると
ころに惹かれました。
同じく優秀賞の「人生100年時代」は、こちらに向かっ
てくる電動車椅子の高齢者が凜としている事と、手を取り
合ってゆっくり向こうへ歩いて行く2人の姿が、様々な生き
方を見せてくれます。
「夕暮の狩り(キツネ)」では、撮影者が一瞬キツネと共
犯になっているような緊張感が魅力的でした。
真っすぐ被写体に向かい、良い瞬間を撮るというシンプ
ルな写真に背筋が伸びました。





小山 登美夫
KOYAMA Tomio
小山登美夫ギャラリー代表

自由表現というセクションだからか自分の作っている作品がはたしてどのカテゴリーなのかを迷っているものも多く見受けられました。技法の熟練という方向性もちろん美術のひとつの方法だと思いますが、自分のやりたいことを目の前に実現してみることがまず大事で、その時そのやり方が唯一の方法であるならば説得力もできます。北川ひとみさんの「あいにくきたよ」は、樹脂粘土を使って半立体の動物や植物が画面を飛び出すような広がりをもって表現される一まさに絵画ではできない表現です。一方、技法的には絵画と同じかも知れないが、その平面性においてイラストレーショナル側面を持つ作品も多く見うけられた。絵画の持つ三次元的なイリュージョンとは違う点においてこのセクションを選んだのだと思われます。象徴性や時代性を色濃くとどめることにもつながり、時代と直結する新しい視点を得られたと思われます。その意味でこの“どこにも属さない”セクションは意義深いと思います。



ひびの こづえ
HIBINO Kodue
コスチュームアーティスト

自由表現とは何か。自由は難しい。私がこの公募に出すとしたら。
自分の好きな事を突きつめる先が自由を知る糸口かもしれないと作品を見ながら思い始めた。
ぎふ美術展賞の「あいにくきたよ」は余りの根の詰めかたに驚いた。始め花は造花と見誤ったほど精密で、麒麟の造形は沢山の色鉛筆で描かれた様に見えるが一本一本が違う色の粘土を丸めて作られている。それによって柔らかい質感が作品の魅力につながっている。
「ONE LINE ART・ふたつのメロン」もよく見ると1本の緻密な線がつながって描かれている。それをゴールドのメロンのヘタが結んでいる。
自由とは自由にどこまでこだわるかが答えなのか。
「回転するYO-YOを並べる」の作品はそれとは逆の軽さ。まるで蝶の様に飛びそう。ラフに切られ塗られた様に見せながら表現の答えはたった一つ。
賞に選ばれた作品には不必要なものが無い。
最後に選んだ「今日の食卓(春)」は既製品の台を外して完成した。



清流の国ぎふ芸術祭
第3回 ぎふ美術展
GIFU ART EXHIBITION



ぎふ美術展賞

「The connection is lost」 山元麻衣（揖斐川町）



優秀賞
「幻想と幻覚」
佐藤正子（岐阜市）



奨励賞
「輪廻」
福田公美（岐阜市）



奨励賞
「全力!」
所久美子（関市）



優秀賞
「迎」
升野琴絵（岐阜市）



奨励賞
「Revolution」
林美都子（美濃加茂市）



奨励賞
「かそけし奏べ」
白木あやめ（各務原市）

ぎふ美術展賞 「静物(テーブルの上)」 林直樹 (岐阜市)



優秀賞 「鉄の街」 鈴木昌義 (中津川市)



優秀賞 「郷愁」 須藤信利 (瑞浪市)



奨励賞 「満開淡墨桜」 川島淳二 (岐阜市)



奨励賞 「あつ。飛行機。」 尾田千里 (可児市)



奨励賞 「雨上がりの岩畳」 関谷文子 (岐阜市)



奨励賞 「少年記」 納義純 (神奈川県)

ぎふ美術展賞 「ファンタジー」 ヒサオ・カメヤマ (関市)



優秀賞
「生命 (いのち) の源流」
樋口勝彦 (岐阜市)



優秀賞
「故郷～岐阜～」
石田昇 (恵那市)



奨励賞
「ゆらぐ大地」
安藤治 (岐阜市)



奨励賞
「水運木」
稲垣保幸 (多治見市)



奨励賞
「石化する流れ」
清水朋文 (大垣市)



奨励賞
「慈」
伊藤敦 (愛知県)

ぎふ美術展賞 「食事中の転寝」 浅野孝之（各務原市）



優秀賞
「池の中」
大西達也（岐阜市）



優秀賞
「纏う」
大野裕之（岐阜市）



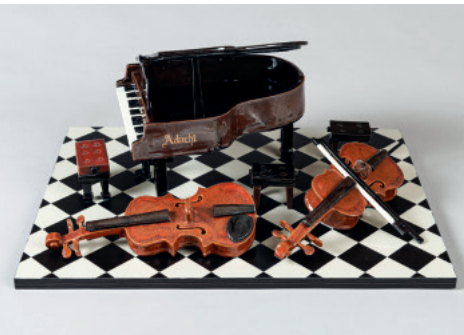
奨励賞
「鉄錆のバラ」
赤石幸夫（岐阜市）



奨励賞
「躍動」
川村晶吾（高山市）

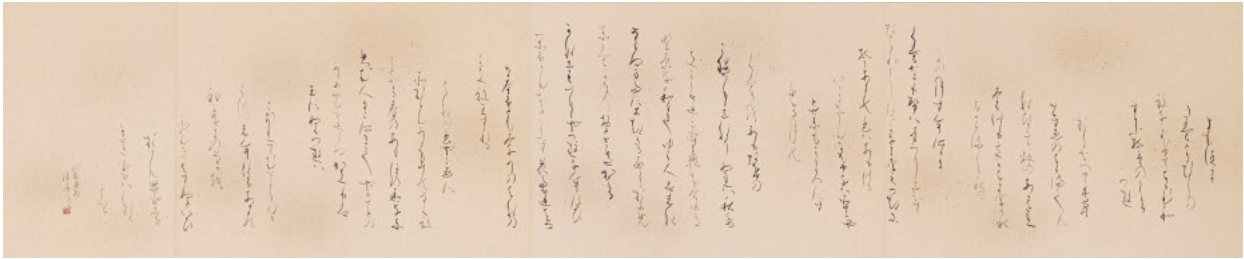


奨励賞
「午後のまどろみ」
馬淵規子（岐阜市）



奨励賞
「静かなる刻」
足立義一（関市）

ぎふ美術展賞 「蟹眼」上籠鈍牛（東京都）



優秀賞
「山家集抄」
青山法舟（岐阜市）



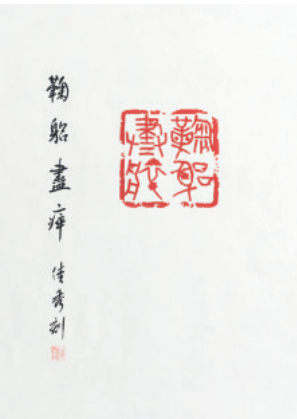
優秀賞
「王恭詩」
三間恵翠（北方町）



奨励賞
「夜坐懷石林茶谷二上人」
永田彩乃（岐阜市）



奨励賞
「堀口大學の詩」
安田朴童（岐阜市）



奨励賞
「鞠船盡瘁」
杉崎佳秀（各務原市）

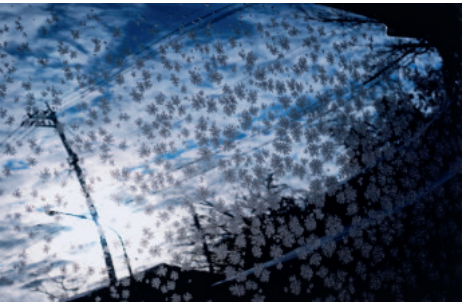


奨励賞
「ほのぼのと」
石田昌枝（各務原市）

ぎふ美術展賞 「上り・一番列車」 太田育伸（富加町）



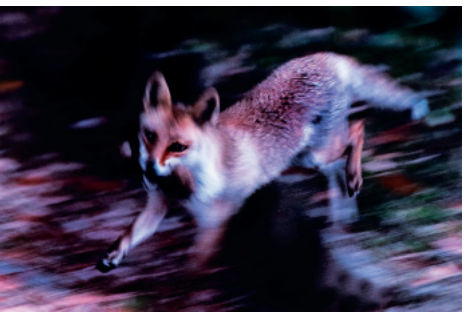
優秀賞
「人生 100 年時代」
蒔苗友紀（大垣市）



奨励賞
「氷点下の朝」
田守真知子（飛騨市）



優秀賞
「アクアリウム」
岩田真津美（各務原市）

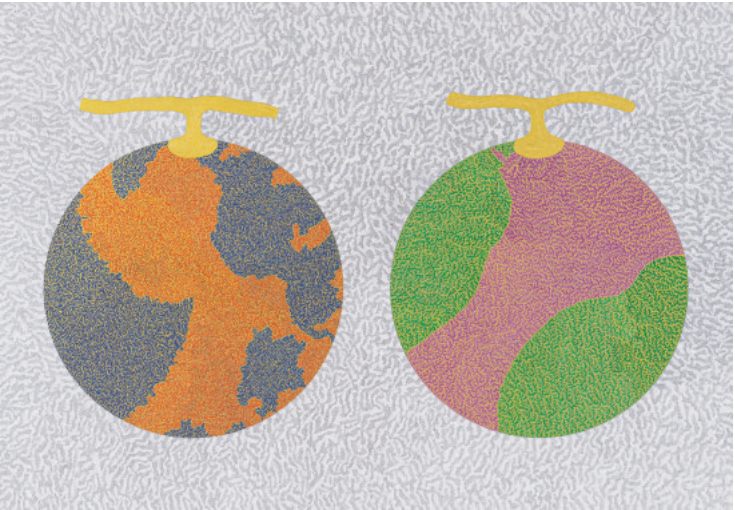


奨励賞
「夕暮の狩り(キツネ)」
渡部与明（愛知県）

ぎふ美術展賞 「あいにくたよ」 北川ひとみ（岐阜市）



優秀賞
「ランダムアート」
中村龍美（山県市）



優秀賞
「ONE LINE ART・ふたつのメロン」
曾良貞義（下呂市）



奨励賞
「回転する YO-YO を並べる」
若尾武幸（岐阜市）



奨励賞
「ひょうたんザウルス
～思いをぶちかませ～」
ケンジ（可児市）



奨励賞
「街」
松葉詩織（中津川市）



奨励賞
「今日の食卓（春）」
早川美香（愛知県）

日本画

ぎふ美術展賞	The connection is lost	山元麻衣	揖斐川町
優秀賞	幻想と幻覚	佐藤正子	岐阜市
優秀賞	迎	升野琴絵	岐阜市
奨励賞	輪廻	福田公美	岐阜市
奨励賞	全力!	所久美子	関市
奨励賞	Revolution	林美都子	美濃加茂市
奨励賞	かそけし奏ベ	白木あやめ	各務原市
入選	さみだるる	伊藤睦美	岐阜市
入選	花言葉は「感謝」	奥田眞弓	岐阜市
入選	白椿	長田麻友子	岐阜市
入選	コロナ禍、我慢の時	川地勲子	岐阜市
入選	干支つくし	木村久美	岐阜市
入選	組む	田中まさこ	岐阜市
入選	いざなう	NAOMI HIGUCHI	岐阜市
入選	ミミズク	子池知里	大垣市
入選	冬支度	杉原秀氏	大垣市
入選	始めに来たるもの	宮原一美	高山市
入選	諸行無常	亀谷隆明	関市
入選	amabile	高木美智子	中津川市
入選	バラの咲く頃	安藤茉莉	各務原市
入選	合歓	川田美恵子	各務原市
入選	五月の徳沢	山上朱實	各務原市
入選	紅葉	野津藤一	瑞穂市
入選	黎明	水野壽子	瑞穂市
入選	裏見の臥龍桜	田端貞満	飛騨市
入選	朝霧の中で	尾藤日出子	郡上市
入選	わたり	浅井新太	下呂市
入選	涼宙	蛭白	下呂市
入選	明鏡止水	木村敦子	笠松町
入選	咲光映	川地三好	垂井町
入選	梅花藻(地藏川)	古川幸代	垂井町
入選	雨がやんだ	前田さやか	東京都
入選	まわる。まわる。	青藍蒼	愛知県
入選	みなもとへ	小林実沙紀	愛知県
入選	ダリア	高木俊一	愛知県
入選	夜半の夏	水野充貴	愛知県
入選	ことばいづる処II	たちおか帽子	三重県

洋画

ぎふ美術展賞	静物(テーブルの上)	林直樹	岐阜市
優秀賞	鉄の街	鈴木昌義	中津川市
優秀賞	郷愁	須藤信利	瑞浪市
奨励賞	満開淡墨桜	川島淳二	岐阜市
奨励賞	雨上がりの岩畳	関谷文子	岐阜市
奨励賞	あっ。飛行機。	尾田千里	可児市
奨励賞	少年記	納義純	神奈川県
入選	マチのカタチ 2021	安藤孝信	岐阜市
入選	中空の瞑想	今尾さち子	岐阜市

入選	したたかな実	大塚佳美	岐阜市
入選	5つの山	大西達也	岐阜市
入選	糧	押味忠志	岐阜市
入選	凝固	小森啓子	岐阜市
入選	青!がんばれ	酒井久栄	岐阜市
入選	あまい叢	桜木須々美	岐阜市
入選	石積み	佐藤正己	岐阜市
入選	OSANPO	杉浦佑治	岐阜市
入選	丑三つ時のファンタジー	竹内美代子	岐阜市
入選	蟻は死の象徴	龍田歩奈	岐阜市
入選	西馬音内盆踊り	中村康子	岐阜市
入選	堤外の小径	林京子	岐阜市
入選	回遊	横山亜里紗	岐阜市
入選	何時かどこかで	脇田忠博	岐阜市
入選	妻とリリーとレオと僕	井上慎介	大垣市
入選	三つ子の魂百まで	久世久子	大垣市
入選	ひまわり	高田鈴代	大垣市
入選	世界と肩を並べた破壊力ある突破攻撃	谷口拓司	大垣市
入選	ウザい奴を黙らせるためのメソッド	平境雅弘	大垣市
入選	覚醒の罅縫	山路徹	大垣市
入選	感染の瞬間	小澤昌樹	多治見市
入選	願いー終息ー	足立義一	関市
入選	環	池田明	関市
入選	氣に成る椅子	馬淵あき美	関市
入選	狙う	村瀬彩香	関市
入選	臼沢鹿子踊	森正俊	関市
入選	Maya Deren	山崎信子	関市
入選	太陽の恵み	山下恵美子	関市
入選	碧水奏	安部成信	中津川市
入選	明日来る夢	天野るみ子	中津川市
入選	トルネードII	上田さよ	中津川市
入選	刻の形象	牛越諒	中津川市
入選	記憶の形	可知則雄	中津川市
入選	明日への鼓動	斉藤みえ子	中津川市
入選	散策・外観・両親の?・答え	西尾香純	中津川市
入選	流麗II	市原奨太郎	美濃市
入選	家族 6年・4年・2年	小川明	美濃市
入選	花祭り	大脇明	瑞浪市
入選	無我無心	紫乃〜murasakino〜	恵那市
入選	平和求めて(コロナ禍)	今瀬昭代	美濃加茂市
入選	相対的な世界と解放	不破十菜生	土岐市
入選	ハツユキカズラ	安田暁史	土岐市
入選	秋の夜長	阿部芳久	各務原市
入選	早朝の狩り	河嵯緑子	各務原市
入選	ふたつの蔵	酒井勝正	各務原市
入選	目下の紅葉	佐藤捷年	各務原市
入選	戻ってこいよ!	島谷三千男	各務原市
入選	のぼるひと	松村ふさ子	各務原市
入選	気色	山田和子	各務原市
入選	永保寺の秋	相沢陽一	可児市

入選	私たちはどうすれば良いですか?	TAMURA PATRICIA	可児市
入選	インド人街の街角	辻文明	可児市
入選	にゃんともはや	洞田智子	可児市
入選	「ごくろうさん」	野村久一	瑞穂市
入選	家路の空似	はるな	瑞穂市
入選	…の領域	山本直司	瑞穂市
入選	ケモの見た夢	安藤優花	本巢市
入選	巨木の生命力	川島鋭政	本巢市
入選	山紫尾花	野々山富子	本巢市
入選	冬を越す野菜	山内敏子	郡上市
入選	世界遺産の平安の祈り	田中泰彦	海津市
入選	うまれる うまれる こどもの日	伊藤泰志	養老町
入選	変化するコンビニートの夕景	中島邦彦	養老町
入選	樹魂	片岡重保	垂井町
入選	これから二人	高木昭子	垂井町
入選	2本の桜の木がある風景	内藤知之	垂井町
入選	落葉の景	鹿野富子	神戸町
入選	カナダの街角	高橋祥泰	池田町
入選	恵那山バラダイス	中島和重	東白川村
入選	気仙沼の復興	浮橋美頭	富山県
入選	空に穿ち 香を放つ	あらかわ佳子	愛知県
入選	琳派ー印象ー	榎本喜保	愛知県
入選	頂きの塔	大口良介	愛知県
入選	ほんと、一息	小倉照江	愛知県
入選	記念日	小玉君子	愛知県
入選	風	島田加寿子	愛知県
入選	ともだち	朱紫紅	愛知県
入選	スタンバイよし	杉田泰昌	愛知県
入選	シューマン Allegro vivace 作品102	鈴木孝治	愛知県
入選	宇宙の詩	細江波瑠	愛知県
入選	雨の駅前通り	宮地恭子	愛知県
入選	夢の続き	よしだまさこ	愛知県
入選	小さなロマンス	濱口友紀奈	三重県
入選	木霊	岡嶋康子	滋賀県

彫刻

ぎふ美術展賞	ファンタジー	ヒサオ・カメラヤマ	関市
優秀賞	生命(いのち)の源流	樋口勝彦	岐阜市
優秀賞	故郷〜岐阜〜	石田昇	恵那市
奨励賞	ゆらぐ大地	安藤治	岐阜市
奨励賞	石化する流れ	清水朋文	大垣市
奨励賞	水運木	稲垣保幸	多治見市
奨励賞	慈	伊藤敦	愛知県
入選	float	坪田立江	岐阜市
入選	怨情 <ENJYO>	篠田和幸	大垣市
入選	人間	村瀬恭平	高山市
入選	鵜と鮎	山田峰司	羽島市
入選	迷宮2021	菅原光則	山県市

入選	きっと・・・どこか・・・	井之口祐子	飛騨市
入選	命	竹林正治	飛騨市
入選	風神・雷神	岩幸	北方町
入選	ねがいの	岩月創平	愛知県
入選	”ほっ、	小倉義夫	愛知県
入選	十三支	萌黄緑	愛知県
入選	宮城野	八木君枝	愛知県
入選	熱の質量II	川上正昭	滋賀県
入選	わかれみち	安川みき	福岡県

工芸

ぎふ美術展賞	食事中の転寝	浅野孝之	各務原市
優秀賞	池の中	大西達也	岐阜市
優秀賞	纏う	大野裕之	岐阜市
奨励賞	鉄錆のバラ	赤石幸夫	岐阜市
奨励賞	午後のまどろみ	馬淵規子	岐阜市
奨励賞	躍動	川村晶吾	高山市
奨励賞	静かなる刻	足立義一	関市
入選	composition	加藤文太郎	岐阜市
入選	灰砂皿	坪井琢郎	岐阜市
入選	六角厨子	広江保水	岐阜市
入選	光	藤岡里乃	岐阜市
入選	うららか	加藤敏一	大垣市
入選	海底の魅惑	古田則子	大垣市
入選	紅葉に映える白川郷	都竹勝子	高山市
入選	せいくらべ	柴田満	多治見市
入選	透磁丸皿	田中陽子	多治見市
入選	夏碗	土岐和幸	多治見市
入選	未確認奇怪生物	春田広樹	多治見市
入選	未来	田川裕之	多治見市
入選	Thorns	横井玲耶	多治見市
入選	織部幾何紋花器	後藤宮次	関市
入選	氷上の舞	市川公平	中津川市
入選	辰砂釉大皿	水野東三	瑞浪市
入選	騎鳳弁天	林学	土岐市
入選	想い	飯野克子	各務原市
入選	我家の孫	加藤洋子	各務原市
入選	灯籠桜2021	渡邊誠	各務原市
入選	手描き黒地金彩紋更紗	馬場澄子	可児市
入選	フクロウの兄弟	古田桂子	可児市
入選	(切絵) 盛夏	打田紀久雄	山県市
入選	彩	後藤恵子	飛騨市
入選	潮騒	渡邊正康	飛騨市
入選	古くて新しい遊び・呼継	英次郎	本巢市
入選	好奇心	T.てつじ	本巢市
入選	うつわ	林正次	神戸町
入選	Melting	YU CHIA PING	石川県
入選	Rebirth(転生)	斎藤知子	長野県

入選	結晶釉大皿	本間友幸	長野県
入選	FLOAT	遠藤慎太郎	愛知県
入選	多様性と柔軟性	岡澤律子	愛知県
入選	自然釉水盤	影山公人	愛知県
入選	デニム風デザイン	菅原信子	愛知県
入選	六角重　秋真盛	土方輝	愛知県
入選	折りの形	伯耆政和	愛知県
入選	一條大蔵譚	八木君枝	愛知県
入選	濃彩斜陶	山本昌弘	滋賀県
入選	天目黒水壺	林田七海	兵庫県

書

ぎふ美術展賞	蟹眼	上籠鈍牛	東京都
優秀賞	山家集抄	青山法舟	岐阜市
優秀賞	王恭詩	三間恵翠	北方町
奨励賞	夜坐懷石林茶谷二上人	永田彩乃	岐阜市
奨励賞	堀口大學の詩	安田朴童	岐阜市
奨励賞	ほのぼのと	石田昌枝	各務原市
奨励賞	鞠躬盡瘁	杉崎佳秀	各務原市
入選	寶墨	浅野修竹	岐阜市
入選	王文治詩	居上紅澗	岐阜市
入選	過香積寺（王維）	井上弥紀	岐阜市
入選	秋	岩田香翠	岐阜市
入選	王漁洋詩	後藤紅葩	岐阜市
入選	鳩巢詩	後藤黎瑤	岐阜市
入選	実朝の歌	清水青蘭	岐阜市
入選	清爽	杉村蓮里	岐阜市
入選	葉錦詩	戸田美祥	岐阜市
入選	舒位詩	花井蘭徑	岐阜市
入選	陳万言詩	古田清流	岐阜市
入選	春日諸子と同じく郊行す	吉田祥山	岐阜市
入選	宿説公房曉起偶成	大石窓雪	大垣市
入選	寒山詩	奥田長春	大垣市
入選	江馬細香詩	堤薰風	大垣市
入選	龍驤	本寒山	大垣市
入選	一點素心	中野秋石	高山市
入選	陶淵明詩「飲酒」	浅野春泉	関市
入選	陳陶詩	内田翠徑	関市
入選	王右軍	岩崎白峯	美濃加茂市
入選	姚氏詩	今田紅溪	各務原市
入選	吳錫麒詩	加藤艸舟	各務原市
入選	朱存理詩	北澤素心	各務原市
入選	中原中也詩	長屋天虹	各務原市
入選	周述詩	林華香	各務原市
入選	于謙詩	林春翠	各務原市
入選	わたのはら	三門美佐子	山県市
入選	百人一首八首	吉井美代子	山県市
入選	擬古	鈴木瑤樹	瑞穂市

入選	王維詩	関谷蒼玄	瑞穂市
入選	鳥	大野愛玉	本巣市
入選	劉基詩	成瀬雪嶺	本巣市
入選	杜審言詩	森本夏溪	本巣市
入選	秋風に	加藤玉華	郡上市
入選	白居易詩	中島千里	下呂市
入選	朝倉房子の句	中島千寿	海津市
入選	篆書七言聯	櫛田征宏	岐南町
入選	陳汝言詩	長屋純子	笠松町
入選	郎士元詩	高井敦史	垂井町
入選	杜甫詩	溝口彩風	垂井町
入選	よしのや万	高橋翠葉	神戸町
入選	杜甫詩	牛田春煌	安八町
入選	杜甫詩	山田香遙	揖斐川町
入選	虞謙の詩	東山栄華	大野町
入選	和歌二首	勝野翠	池田町
入選	山家集より十二首	古山玉扇	御嵩町
入選	散氏盤一節	青山卿雲	埼玉県
入選	王安石の詩	葵沙	埼玉県
入選	中極殿召對作	小林心華	埼玉県
入選	融通無礙	樋口大振	千葉県
入選	杜甫詩	和泉滴翠	東京都
入選	粹	内田一煌	東京都
入選	千字文一節	岩田幽雅	東京都
入選	詩經秦風・小戎	小杉青陽	東京都
入選	臨張猛龍碑	土肥青冰	東京都
入選	張九齡詩	中村喬華	東京都
入選	臨石鼓文	山田明燦	東京都
入選	飛	田平雄飛	静岡県
入選	春の景色	上野明美	愛知県
入選	小夜ふけて	小川智	愛知県
入選	うぐひす	川本俊子	愛知県
入選	五月雨の	馬場景子	愛知県

写真

ぎふ美術展賞	上り・一番列車	太田育伸	富加町
優秀賞	人生100年時代	蒔苗友紀	大垣市
優秀賞	アクアリウム	岩田真津美	各務原市
奨励賞	氷点下の朝	田守真知子	飛騨市
奨励賞	夕暮の狩り(キツネ)	渡部与明	愛知県
入選	ギョギョッ	伊藤美代子	岐阜市
入選	爆風	岩田巖	岐阜市
入選	共生の森	杉山省治	岐阜市
入選	ニヤにかご用かニヤ？	田中友梨	岐阜市
入選	争奪	棚瀬静雄	岐阜市
入選	書道パフォーマンス	戸崎夏妃	岐阜市
入選	お口でアッピール	長野勝	岐阜市
入選	ざわめく木霊	本間かよ	岐阜市

入選	冬紋	松野幹郎	岐阜市
入選	スブラッシュ	三浦沙月	岐阜市
入選	ノンちゃん	山口義文	岐阜市
入選	スーパーへ	大久保金行	大垣市
入選	コロナ消滅祈願	大橋浩美	大垣市
入選	朝霧の中で	河合明	大垣市
入選	挑戦	乗原権一	大垣市
入選	サン・ライズ	高木俊満	大垣市
入選	つまご宿	林孝弘	大垣市
入選	滝の音色	日比野喜一	大垣市
入選	春うらら	松井一枝	大垣市
入選	夕まずめの瀬張り漁	水谷博光	大垣市
入選	伝統行事（舞込み）	牛丸昭夫	高山市
入選	八重菊の折り	小島武	高山市
入選	群氷	坪内義彦	高山市
入選	春を呑む	直井隆義	高山市
入選	雪華沿線	原田尚幸	高山市
入選	白夜	松山昇	高山市
入選	生誕2ヶ月の眼差し	代情岑郎	高山市
入選	お疲れさま	浅野健	多治見市
入選	日常が待っている	小池克憲	多治見市
入選	かぐや姫の小径	廣田昭男	関市
入選	白昼夢	因幡純一	美濃加茂市
入選	盛夏	大野智幸	各務原市
入選	活	川島昭良	各務原市
入選	宇宙旅行	河田祐次	各務原市
入選	ベアの飛翔	菅野富春	各務原市
入選	Fall in Love	渡邊道雄	各務原市
入選	植樹	鈴村龍祐	可児市
入選	恩師	原美由紀	可児市
入選	エレガント	植埜勇夫	飛騨市
入選	鎮魂の湖	尾内治良	飛騨市
入選	秋霜	重山照夫	飛騨市
入選	お祈り	尾藤榮子	郡上市
入選	けあらしの日	古田雅久	郡上市
入選	コロナ禍の介護	福谷昌己	下呂市
入選	飛翔	成瀬憲司	岐南町
入選	光射す	吉田由香	岐南町
入選	静寂	伊藤日出子	養老町
入選	大寒の朝	草野次雄	養老町
入選	水辺のハンター	北嶋敏和	垂井町
入選	越前海岸の夕暮れ	富田佳信	垂井町
入選	惜春	末松正弘	揖斐川町
入選	湖北の冬	谷泰宏	大野町
入選	静寂閑雅	増田敏明	大野町
入選	反映	高橋二三夫	池田町
入選	Dancing Water　－踊る水－	井出祥子	神奈川県
入選	海の踊り子	丸尾奨	神奈川県
入選	光の呼吸	加藤大貴	愛知県
入選	神秘の日の入り	高木康行	愛知県

入選	海を眺めて	新藤由貴	三重県
入選	Light　of　Life	松尾真由美	香川県
入選	#ケノハレ　#坂出の猫	山田晋司	香川県

自由表現

ぎふ美術展賞	あいにくたよ	北川ひとみ	岐阜市
優秀賞	ランダムアート	中村龍美	山県市
優秀賞	ONE LINE ART・ふたつのメロン	曽良貞義	下呂市
奨励賞	回転するYO-YOを並べる	若尾武幸	岐阜市
奨励賞	街	松葉詩織	中津川市
奨励賞	ひょうたんザウルス～思いをぶちかませ～	ケンジ	可児市
奨励賞	今日の食卓（春）	早川美香	愛知県
入選	石庭	井戸義智	岐阜市
入選	ラクシュミー	奥田記子	岐阜市
入選	ファンネルフラワー	北川貞子	岐阜市
入選	家族	佐伯美千代	岐阜市
入選	光の中で	田藤哲也	岐阜市
入選	イモムシ増殖	帆足勇一郎	大垣市
入選	流転する先へ	可知井英敬	多治見市
入選	おとうさん	児山小枝	多治見市
入選	物思い	児山睦	多治見市
入選	PEACE	森彩未	中津川市
入選	薄美濃　式進法	空桜	美濃市
入選	聖獣	安藤英治	瑞浪市
入選	鎌鬼8	横関空悟	美濃加茂市
入選	わたしはいない	伊佐治孝文	土岐市
入選	Era	eltte	土岐市
入選	トマトありけり	さとうくみ子	可児市
入選	Spherical life form floating in space	二代目ほろ丸	可児市
入選	胸懷～cocoon～	古田直文	山県市
入選	I'm alone but not lonely.	吉川悠希	瑞穂市
入選	森の水車	渡邊正康	飛騨市
入選	空へ	T.てつじ	本巣市
入選	わた絵「主人を想う」	堀田きよみ	本巣市
入選	MiXSUN	Masashi Ueda	郡上市
入選	MINO	村山恭子	池田町
入選	KIRI2021	石原康臣	東京都
入選	Lyric Movie No.37	Bloom9	東京都
入選	幼虫たちがウウウヨしちゃってる	カミジョウミカ	長野県
入選	ネガイゴト☆ママゴト	内山千聡	愛知県
入選	わすれてあげない!	鹿村香名	愛知県
入選	はなれていてもいっしょ	野瀬昌鷹	愛知県
入選	山笑い、海煌めき、川清らかにして、空高し	縹瑠璃	愛知県

「清流の国ぎふ芸術祭」の概要

戦後間もない昭和21年から平成27年に至るまで69回の歴史を刻んだ「岐阜県美術展」は、時代の変遷や表現の多様化に対応した見直しによって、新たに「清流の国ぎふ芸術祭」として3つの事業を柱に展開しています。

1つめの柱は、2017年、想像力溢れる新たな才能の発掘と育成を目的に第1回が開催された、革新的な企画公募展「Art Award IN THE CUBE」。

2つめは、より広く県民に作品発表の機会を提供する公募展「ぎふ美術展」。

そして3つめの柱となるのが、年間を通じ、県内各地で様々なスタイルのプログラムを展開し、アートに親しむ場(ラボ)を提供するアート体験プログラム「アトラボぎふ」です。

清流の国ぎふ芸術祭	
(2017,2020,2023…)	(2018,2019,2021…)
Art Award IN THE CUBE	ぎふ美術展
全国規模の公募展 - 新たな才能の発掘と育成 - アートに関わる人材の育成とネットワークづくり - 県民に新たな形のアートの鑑賞機会を提供 3年に1回開催	県民に広く開かれた美術公募展 - 美術に親しむ県民の裾野を拡大 - 県民の創造力、鑑賞力の向上に寄与 - 創作活動に励む全ての県民に発表の機会を提供 3年に2回開催
(2018 ～毎年実施)	
アート体験プログラム –アトラボぎふ–	
幅広い県民が参加できる美術講座、ワークショップ等を全圏域で展開 - 美術に対する関心を高めるきっかけづくり - 美術に関する視野を広げ、知識、技術を向上させる機会を提供 - 毎年実施	

清流の国ぎふ芸術祭 アート体験プログラム

アートラボぎふ

「アトラボぎふ」を通じて、“アート”は決して堅苦しく敷居の高いものではなく、人それぞれが感じたことを楽しむのびのび表現することで、人それぞれの価値観、多様性を、お互いが理解し合うことにつながるような、そんなきっかけになればと願っています。

この「アトラボぎふ」の一環として、「第3回ぎふ美術展」期間中にも、県美術館の会場でプログラムを開催しました。

クロストーク | 小山登美夫 × ひびのこづえ

テーマ「アートの社会性と未来」

ギャラリー代表として数多くの新しい才能を発掘してきた小山登美夫氏と、コスチュームアーティストとしてテレビ番組や舞台の衣装を手掛けるひびのこづえ氏による、二人の活動の紹介から今後のアート展望に至るまで、示唆に富む対談となった。

まず、ひびの氏が口火を切った。衣装の制作で深く関わった東京五輪の文化イベントにおけるパフォーマンスを紹介。コンセプトを設定し、衣装を作り上げていく作業が、苦しいながらもとても楽しかったと述べた。加えて、元々社交的な性格ではなかったが、舞台の演出家やパフォーマーとのやりとりを通じて、「服」は人に着てもらうもので、人に着せるには、人と話をしなくてはならないと気づき、それからはコミュニケーションが楽しいと思えるようになったとのこと。一方で、こういったパフォーマンスに携わる中で、衣装は大事な要素であるにも関わらず、評価されにくいと本音を漏らす。後進に続くような人たちがどうすれば活躍できるのか、と小山氏に投げかけた。

それに対し小山氏は、過去にも遡り、時代を追って並べる衣装をテーマにした展覧会や、今現在世界各地で使用されている衣装・コスチュームを一同に並べる展覧会を提案。展覧会の開催により、絵画や彫刻がそうであったように、情報が蓄積されていき、ジャンルとして確立していくのではないかと、日本には衣装やデザインを専門分野とする美術館がないことも指摘した。ひびの氏も、自身が影響を受けた例として、デザインを専門とするロンドンのヴィクトリア&アルバート博物館を紹介

講演会 | 桑原鑛司氏 (AAIC 企画委員会委員長・ぎふ美術展企画委員会副委員長)

テーマ「現代アートの楽しみ方ーぎふ美術展の自由表現部門とAAICー」

冒頭、69回続いた「岐阜県美術展」を改革し「清流の国ぎふ芸術祭ぎふ美術展」を立ち上げる際に、「Art Award IN THE CUBE (以下AAIC)」とのつながりを期待して『自由表現部門』を新設した話を紹介。「AAIC」も「ぎふ美術展」の自由表現部門も「現代アート」として捉えられることもあるが、「現代アート」の展覧会と名乗ったことは一度もない。しかしながら、最近よく使われる「現代アート」とはどんな意味があるのか、講師自身の考えを語った。

講師が学生だった1960年代は、抽象表現主義の画家たちが大活躍していた頃であり、彼らは、絵画とそうでないものの垣根となるギリギリの領域に果敢にチャレンジしていた。そうした芸術に出会い、講師は心が揺さぶられる感動を覚えたと振り返る。

一方でほぼ同時代に登場し、これまでの芸術への破壊行為や既成の価値観に対してチャレンジを行ったマルセル・デュシャンを紹介。彼の行為は美術を学んでいた講師にとって、到底受け入れられるものではなかったが、最初是否定派の多かったデュシャンの表現も、時代の変化とともに認められるようになり、より多様な方法や手段を使った表現も世間ではアートと呼ぶようになった。さらにここ10年では「現代アート」という言葉も頻繁に見聞きするようになり、この言葉に抵抗を覚え、この言葉をどう解釈すべきなのか、と長い間自らに問い続けてきたという。

この長い問いに対する新しい考え方に辿り着いたのは、最近のこと。

日 時：8月8日(日) 13:30 ～ 15:00

場 所：岐阜県美術館 講堂

参加者：72人

介した。

続いて、小山氏の活動に話題が移る。小山氏は、新しい才能を探すため、ここ15年ほどは主要な美術大学の卒業展にも足を運んでいる。見つけてきた才能をどうやって世間に発信していくかを考えるのも仕事の一つと言う。数多くの才能を見い出してきた小山氏は、ぎふ美術展の自由表現部門の審査や展覧会全体を通じ、洋画や彫刻といった部門に収まらない表現が増えていることを改めて感じ、興味深く思ったとのことであった。

最後に、小山氏が、近年は日本の企業が、西洋の作品をコレクションするだけでなく、今のアーティストとのコラボレーションや、アーティストのサポートなど、様々な形で動き始めていると紹介。一つ一つが派手な活動でなくても、それがつながっていけばアートはより良くなると述べた。ひびの氏もぎふ美術展にも通じるところがあると続け、これからも順調に発展し、県民にとって良い環境を作っていってほしいと締めくくった。



日 時：8月9日(月・振休) 13:30 ～ 15:00

場 所：岐阜県美術館 講堂

参加者：53人

人類学者である山極壽一氏にお会いし、山極氏の著書にある「人は歩くことで何かを表現している。人は歩くだけでも何かを表現する生き物なんだ。これがアートの起源ではないか」という一節に触れ、眼から鱗の思いであった。講師がこれまで考えてきた「現代アート」の「アート」の部分を山極氏の考える「アート」に置き換えると、「現代アート」は何でもありとなる。誰でも作家になれるし、その作家が自分の世界観や解釈を作品を通して表現すればいいのだという考えに至った時、非常に気持ちが楽になったとのこと。

そして重要なことは、「アート」においては多様な解釈が許されるということ。同じ一つの作品に対して色々な解釈が成り立つということは、見る側にとっての喜びであり快感でもある。その作品の解釈が正しいかどうか分らないが、自分はどう考えた、それでもいいのだとなれば楽しみ方はそれ自体、自由になると締めくくった。

*出典：鷲田清一、山極壽一「都市と野生の思考」(インターナショナル新書、2017)



クロストーク | 伊藤俊治 × 野村佐紀子

テーマ「愛と写真と身体と」

美術史家の伊藤俊治氏と写真家の野村佐紀子氏が、野村氏の作品等を中心に、写真が持つ力と可能性を考察する奥深く、今はこの世にいない方たちへの追憶が綴られた対談となった。

野村氏の最新写真集「春の運命」を題材に、伊藤氏はこう提起する。遺影はその人の日常の中に染み込んでいるようなものが現れている写真を使った方が良いと。野村氏の作品には、死者を良い形で見送りたい気持ち、人の想いや心の厚み、深みが感じ取れると評した。対し野村氏は、死を特別視するのではなく、気づかない日常に潜んでいる何かの気配や佇まいのようなものがシャッターを押させると言う。

次に、野村氏は「モノクローム」の魅力を語る。写真を始めた時に感じた、モノクロだと、見えないものが写るのではないか、といった期待感・好奇心が原点。モノクロの情感とカラーの情報量の挟間を行き来しながら、モノクロ写真を続けているとのこと。伊藤氏も、モノクロは人間の情感の色であり、人の想いを盛っていく器として最適だと。

続いて伊藤氏は、野村氏の写真は、その場の状況や対象者などの条件次第で、どんどん変化していく、男性を撮影した作品からは対面して何かを見つけ出したい、女性を撮影した作品からは被写体との対面ではなくて「共犯」のような、何かを一緒に企んでいるように感じると。野村氏は軽やかに応じる。異性、同性、年齢差に応じて色々な関係性や形があるが、そうした変化の中に身を置きながら、感覚的に撮っているだけだと。

対談が深まる中、野村氏が人間の身体以外にも、花や風景、生物等を写していて、その作品には特別な固有のトーンがあり、物や人に纏わりついて離れないベールのようなものがある、と伊藤氏は指摘する。写真家にはこのベールの存在が欠かせないが、野村氏の写真からは、メランコリーにも似た特別な思いが沸き上がると。

結びに、伊藤氏は岐阜出身の増山たづ子氏を紹介する。増山氏はダム建設で水底に沈む故郷徳山村の「ミナシマイ」(皆終い)の日までに、残せるものだけでも残そうと村の隅々までを撮った。それらは「村の遺影」となり彼女の死後に写真集となった。その名は「すべて写真になる日まで」。

伊藤氏は語る。写真には我々の想像を超えた力がある。その力は日々の営みから生まれて、長い継続性の上に成立する。写真の蓄積と写真が示す時間がどんなに可能性に満ちたものかを感じさせてくれると。野村氏も、その可能性を信じて今後も撮り続けていきたいと応じ、対談を終えた。



クロストーク | 遠藤彰子 × 笠井誠一

テーマ「絵はやっかいなものだ」

笠井誠一氏と遠藤彰子氏が、若き時代から現在までの互いの作品を振り返りながら、絵を描き続ける難しさと魅力を率直に語り合い、和やかな雰囲気での対談となった。

最初に、遠藤氏は、「絵は本当にやっかい。」ということを強調し、「やっかいを通り越した先に最高にうれしい瞬間があり、やっかいだからこそ、ここまで続けてこられたのかもしれない。」と。これに対し笠井氏も、遠藤氏同様、自身も試行錯誤を繰り返しながら制作する作家の部類になると応じた。

笠井氏は、終戦直後の激動の時代、絵を創作する上で確かなものを求め、基本にこだわってアカデミックな道を辿り、パリ留学時代には正当な絵具の使い方、人体のデッサン、構図を徹底的に修行したという。留学中、静物を学ぶ中で、平面の中でどのように形を構築していくかということが制作テーマになり、今日の原点ともなっている、と述べた。

一方、遠藤氏は幼い頃、蛸石で道路に好きなように絵を描いていたのが原点であり、妊娠中も毎日、その日の出来事をイメージに変えて絵を描き続け、さらには、我が子の病気をきっかけに、「街」の造形を通して、夕暮れなどの情景と自身の内面とを対比させながら描くようになった。その後も、膨大な読書量から得られた知見も活かしながら絵を描き続けてきたと述べた。

笠井氏の自画像作品を紹介した場面では、2人揃って「自画像」の

日 時：8月15日(日) 13:30 ～ 15:00

場 所：岐阜県美術館 講堂

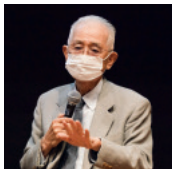
参加者：63人

魅力を説いた。遠藤氏は「描くことに困った時、自画像を描く。」と、笠井氏も「自画像は自分と向き合う行為であり、画家にとっては大きなテーマだ。」と述べた。

様々な試行錯誤や挑戦を経た現在、笠井氏は自身を「自由になってきている。」とし、遠藤氏は「若い時よりも、感覚の表現が分かるようになり、少し楽になった。」と述べた。

続いて、絵が持つリアリティの大切さに話題が移る。笠井氏は、絵の中に人がいて創り出すドラマがリアリティを持っていなければ、観る者に実感をもって伝わらないこと、遠藤氏の作品にはこのリアリティがあり、その世界観は遠藤氏しか描けない不思議な魅力があると評した。

笠井氏は、最近になり、平面性という視点で、古い時代の日本の作品にキュビズムを先取りするような優れたものを感じ、日本の美術の見直しにあらためて関心を寄せているとのことであり、長年第一線で活躍し続けている両氏ならではの、今後の更なる挑戦に対する意欲も窺える対談となった。



作品講評会 | 洋画

講師：遠藤彰子、笠井誠一

総評

非常にレベルが高かった。一番の特徴は応募作品の「多様性」。どのような基準で審査をすべきか難しかった。

作品は完璧に仕上げることは求めではなく、自分の作品のどこがいいか、足りないか、点検・検証し考えていくことが大切。

ぎふ美術展賞「静物（テーブルの上）」

インパクトのある構成、スケールの大きさを感じる。またザクザク描くところと細かく描くところの疎と密を巧みに使い分けている。大中小の塊としての面白さ、白黒のきれいさがありつつ、大きな流れをうまく形作っており、完成度が高い。

優秀賞「鉄の街」

色を赤黒白に制限し、効果的に使っているので迫力がある。抽象と具象の間(境)のような形で絵を作り上げているところに、作者の試行錯誤が垣間見え、絵作りの面白さと魅力を感じた。

優秀賞「郷愁」

人の生活が色濃く反映された小屋とナイーブな自然との対比がおもしろい。絵を描く力がある。ただ空の塗り重ねがないがしろになったのは惜しい。

奨励賞「満開淡墨桜」

喜びや春の兆しが絵から香ってくる作品で、ある程度成熟した視点

日 時：8月15日(日) 15:15 ～ 16:30

場 所：岐阜県美術館 展示室3

参加者：65人

から見えてくるものが感じられる。構成上、画面の上側に白をもっていったのも良く、桜の美しさ、爽やかさがよく出ている。

奨励賞「雨上がり岩畳」

雄渾、骨太な構図で水と岩との対比がこの作品の命となっている。白と黒の攻め合いのところが力強い。やや黒が単調なので、絵具の使い方にもう一工夫あると良い。

奨励賞「あっ。飛行機。」

浮遊感のような物の捉え方に可能性を感じる。いろいろなものが絵の中に挟まっていて、遊び心が随所に見られ、見る人が受け入れてしまうような自由さが新鮮でユニーク。

奨励賞「少年記」

建物の造り、人の散らばり方、人が非常に動いていた街や人の住む空間の情景を魅力的に捉えている。ただし空の描き方や人物の描き方に更なる工夫があると良い。



作品講評会 | 工芸

講師：隠崎隆一、三輪嘉六

総評

応募作の材料、材質、形態が大変多様性に富んでいる中、比較的工芸品として捉えやすい作品を、工芸の幅広い分野の中で偏らないよう、いろいろなジャンルから選んだ。

ぎふ美術展賞「食事中の転寝」

一般的にイメージする工芸とは違い、日常生活で使うような物ではないが、ユーモアと個性があり、全体の雰囲気の中で非常にバランスが取れている。また生活の中での心の豊かさが感じられ、精神的な作行を成す物として評価した。

優秀賞「池の中」

モザイクの背景に水中生物がいろいろな形で表現されており、全体のバランスが整っていて大変美しい組作品で、作者の心の中を覗いているよう。あえてパラバラな額縁を使った点も興味深い。

優秀賞「纏う」

緻密で規則性のある技術を積み上げ、時間をかけて丁寧に作り上げ、細かな技法がしっかり表現されている。熟練した技術とデータに裏付けられて完成した工芸らしい作品である。

奨励賞「鉄錆のバラ」

非常に緻密で説得力のある金工品であり、美しいバラをモチーフにしてあわよくば鉄錆をきれいに赤く見せてしまおうとの積極的な意

日 時：8月8日(日) 15:15 ～ 16:30

場 所：岐阜県美術館 展示室4

参加者：48人

図を感じ、今後の期待も込めて選んだ。

奨励賞「午後のまどろみ」

タイトルから受ける印象とは異なり、派手な色で心騒ぐような雰囲気があるが、時間をかけて制作し、重厚で多彩な染織作品に仕上がっている点を評価した。

奨励賞「躍動」

一目見て、木の特徴をよく知っている熟練の方の作であろうと想像できる作品。非常に手の込んだ、工芸的なテクニックを使っている。岐阜という地域性も持ったこういった作品が、今後もっと出てくることを期待している。

奨励賞「静かなる刻」

陶芸の釉薬のことも土のこともよく知った作家の作品であり、展示台の選び方も行き届いている。見ていだけで楽しく、タイトルと作品とがマッチしていて、静けさからやがてすばらしいハーモニーを奏でそうな雰囲気が良い。



作品講評会 | 書

講師：富田淳

総評

古典を出発点にしながら自分らしさを盛り込む臨書の多さから、審査を通じて、この展覧会が、あらゆる人が参加できる、自由な展覧会であるという印象を強く持った。そうした中、意識的に、さまざまなジャンルの良い作品を一つずつ選んだ。

ぎふ美術展賞「蟹眼」

余白がきれいで隅々まで神経が行き届き、躍動感あふれる表現が素晴らしい。さらに潤筆と渴筆、黒と白など、相反する要素の対比が見事な形で生まれている点も面白く、拔きんでた作品だった。

優秀賞「山家集抄」

古典の良さを良く学びとり、今回、最も仮名本来の持つ美しさを表現している作品。金粉が散らされた料紙（加工紙）の特色をよくつかんで、幅の広い表現力を示している。

優秀賞「王恭詩」

滲みと擦れの対比がよく出しており、余白も美しい。落款も本文と調和するように書かれており、印章も考え抜かれた所に慎重に押されている。隅々まで神経が行き届いている作品。

奨励賞「夜坐懷石林茶谷二上人」

艶やかな赤い料紙の色と墨との対比がまず人目を引く。擦れが出にくい料紙の特質を知った上での運筆の巧みさ、三行それぞれの字

日 時：8月8日(日) 11:00 ～ 12:15
場 所：岐阜県美術館 展示室4
参加者：41人

幅をセオリーどおりに書いた全体のまとめ方がすばらしい。

奨励賞「堀口大學の詩」

近代詩文という一般の人にとって読みやすく親しみやすい素材を、意図的な作り込みをせず紙面いっぱいに展開し、淡々と筆を運んでいる点に好感が持てる。

奨励賞「ほのぼのと」

雅な仮名の伝統的な技法を学んだ上で、自分なりの良さを出している。左右にある字のグループの大きさのバランス、グループの中でのそれぞれの滲みと擦れの味わいが、巧みな紙面構成の中で活かされている作品。

奨励賞「鞠躬盡瘁」

印刀の鋭い切れ味を感じさせる刀法、石の欠け具合も良く、重要な要素がうまくまとまっている。印の押し方も慎重かつ丁寧で、優れた篆刻作品。



作品講評会 | 写真

講師：伊藤俊治、野村佐紀子

総評

写真は日々の営みとして継続して撮っていかないと作品に良さが積み出ない。それを念頭に置きながら研鑽していただきたい。また、時間をかけて何かを撮ろうと試みている作品もあって、あらためて写真はおもしろいと感じた。

ぎふ美術展賞「上り・一番列車」

非常に特別な瞬間をダイナミックに捉えている。人工物と自然の衝突の様を表し、いいタイミングで、光の具合や車内の様子を克明に撮っている。初めて対象と向き合った時の新鮮な感覚が溢れている。縦長の構図も決まっている。

優秀賞「人生100年時代」

前に車椅子の老人、後ろに夫婦連れが対照的に写り、おもしろい瞬間を捉えている。人間が老いることのいろいろな様相をモノクロームで表現している。デジタル作品だったが、大型プリントにしてコントラストを明確にするとよい。

優秀賞「アクアリウム」

自宅のベランダで凍った氷の結晶をマイクロレンズで捉えた写真。見た瞬間に強い印象を受けた。水族館をイメージした非常に抽象的でデリケートな作品。



日 時：8月14日(土)15:15 ～ 16:30
場 所：岐阜県美術館 展示室4
参加者：41人

奨励賞「氷点下の朝」

青い澄み切った空、そこに霜が貼りついて向こう側の風景が覆われて二重写しになっている構図で、人の感覚がよく捉えられている。アングルや視点をちょっと変えるだけで同じ景色が凄く変わる写真のおもしろさを示している。

奨励賞「夕暮の狩り(キツネ)」

カメラとキツネの目が合った一瞬の緊張度が魅力的。一緒に何かを創造しようと企む「共犯関係」に陥ったかのような感覚と、互いに敵視しているかのような感覚とが生まれる。ある程度、経験や観察を積み重ねないと撮れない写真。

作品講評会 | 自由表現

講師：小山登美夫、ひびのこづえ

総評

自分が作りたいという衝動をぜひ形にしてほしい。そしてぎふ美術展への出品をきっかけに、それを大事にして、人生の中で創作活動を次につなげていってほしい。

ぎふ美術展賞「あいにくだよ」

樹脂粘土に色を練り込み、長い時間をかけ、全て手作業で制作しており完成度が高い。枠から抜けて「はみ出る」という発想もおもしろかった。半立体でしかできない構図。可愛さとシュールが混在しており、作家の今後が楽しみ。

優秀賞「ランダムアート」

グリッドを使って作品全体を大きく表現する構図に迫力があり、その枠内に組み込んだ「だまし絵」的な題材もおもしろい。表計算ソフトのExcelの機能を駆使して輪郭書きや色付けをする描き方も独特で、偶然が生み出す妙味もある。

優秀賞「ONE LINE ART・ふたつのメロン」

色がお洒落でセンスがよく、グラデーションもすばらしい。ボールペンの一筆書きで全体を描いており、細やかな輪郭書きや硬さが違う鉛筆を何種類か使って色付けをしていく細かな作業がおもしろさを生んでいる。

日 時：8月8日(日) 15:15 ～ 16:30
場 所：県美術館 展示室4
参加者：51人

奨励賞「回転するYO-YOを並べる」

壁面展示するとより魅力的な作品。創作にかけた力や工夫を観る者に感じさせない軽さがユニークでよい。

奨励賞「街」

技術的な完成度云々よりも、若い人が持つ感情や感覚を強く感じた。構図の中にある字やバーコードの題材もおもしろい。作者が持つ面白い部分が未完成のまま表現されていて、自由表現ならではの作品。

奨励賞「今日の食卓(春)」

ある種の不気味ささえ漂う、立体表現の仕方と絵のおもしろさ、独特の色合い、ずれの不思議さがある。「食」への「好き」が高じてそれをすごく「伝えたい」感じが伝わる作品。



うまれる。あふれたす。



主催者挨拶
岐阜県知事 古田 肇



応募状況

第3回ぎふ美術展応募・審査結果

	日本画	洋画	彫刻	工芸	書	写真	自由表現	合計
応募点数	73	229	30	89	219	233	118	991
ぎふ美術展賞	1	1	1	1	1	1	1	7
優秀賞	2	2	2	2	2	2	2	14
奨励賞	4	4	4	4	4	2	4	26
入選	30	86	14	40	62	61	31	324
入賞・入選	37	93	21	47	69	66	38	371
入賞・入選率	50.7%	40.6%	70.0%	52.8%	31.5%	28.3%	32.2%	37.4%
県内	62	196	22	77	128	210	95	790
県外	11	33	8	12	91	23	23	201
県外割合	15.1%	14.4%	26.7%	13.5%	41.6%	9.9%	19.5%	20.3%
平均年齢	66.0	59.0	58.9	55.7	47.5	54.4	40.4	53.4

市町村・県別の応募者数

県内

市町村	計	市町村	計
岐阜市	202	岐南町	7
大垣市	66	笠松町	7
高山市	40	養老町	6
多治見市	39	垂井町	15
関市	28	関ヶ原町	3
中津川市	19	神戸町	7
美濃市	6	輪之内町	3
瑞浪市	6	安八町	4
羽島市	19	揖斐川町	13
恵那市	5	大野町	6
美濃加茂市	10	池田町	12
土岐市	13	北方町	4
各務原市	63	坂祝町	1
可児市	48	富加町	1
山県市	13	川辺町	1
瑞穂市	30	七宗町	0
飛騨市	15	八百津町	1
本巣市	29	白川町	0
郡上市	16	東白川村	1
下呂市	7	御嵩町	16
海津市	8	白川村	0
合計		790	

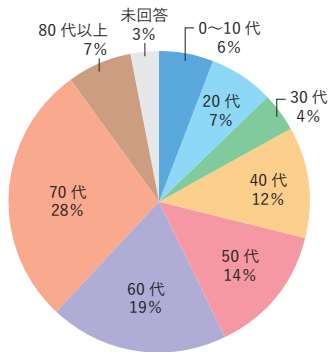
県外

都道府県	計
北海道	1
茨城県	1
埼玉県	9
千葉県	4
東京都	22
神奈川県	13
新潟県	1
富山県	1
石川県	3
長野県	3
静岡県	30
愛知県	92
三重県	9
滋賀県	3
京都府	1
大阪府	2
兵庫県	1
奈良県	1
徳島県	1
香川県	2
福岡県	1
合計	201

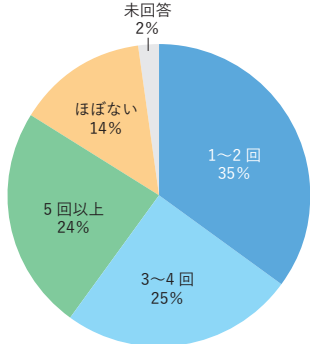
来場者アンケート

対象者 第3回ぎふ美術展来場者（7,832人）
調査方法 会場内にアンケートコーナーを設置、紙面による任意のアンケート調査
回答数 513件

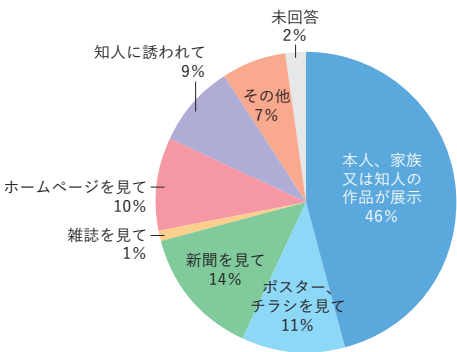
1 年齢



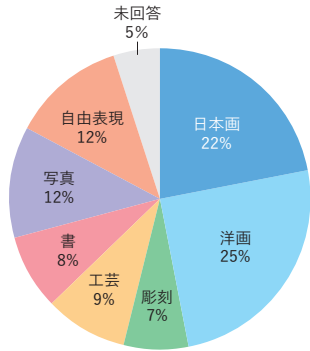
3 各種美術展への年間訪問回数



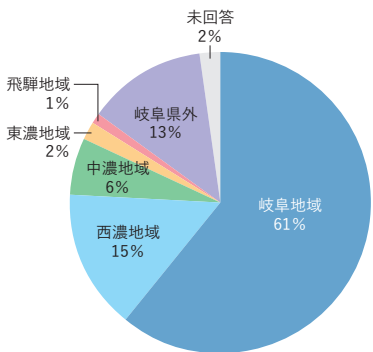
5 ゐふ美術展の開催をどちらでお知らせになりましたか。



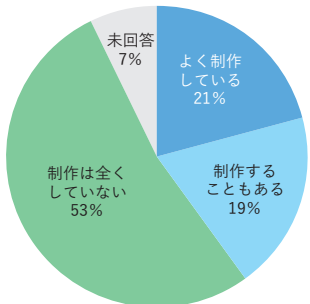
7 今回、ご関心を持ってご覧いただいたのはどの部門ですか。



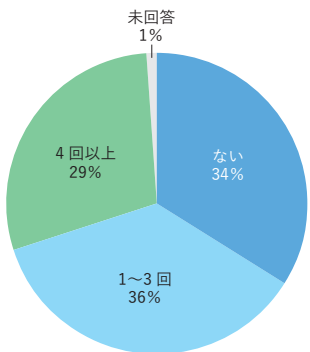
2 お住まいの地域



4 美術作品制作



6 過去に岐阜県美術展（県展）又はぎふ美術展を訪問・鑑賞されたことがありますか。





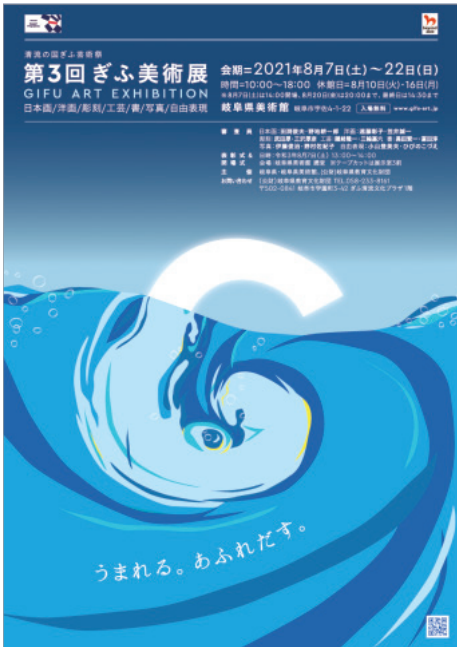
作品募集ポスター



作品募集チラシ（表）



作品募集チラシ（裏）



展覧会ポスター



展覧会チラシ（表）



展覧会チラシ（裏）



岐阜新聞（2021.1.9）



岐阜新聞（2021.6.19）



中日新聞（2021.1.10）



中日新聞（2021.6.19）



清流の国ぎふミナモト通信（2021.8月号）



月刊誌「美術の窓」（2021.11月号（株式会社 生活の友社刊行））



岐阜県美術館正門看板



審査員講評パネル



岐阜県美術館北側看板



展示室3入口正面

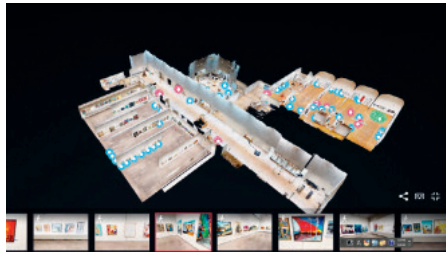
「ぎふ美術展」における新型コロナウイルス感染症防止対策の徹底

出入口での消毒液の設置と検温を実施するとともに、表彰式・開場式や関連プログラムにおいては、来場者の入場制限を行いました。催し物への参加者を制限し、入場者に対しては、マスクの着用、岐阜県感染警戒QRシステムへの登録、入場状況に応じたソーシャル・ディスタンスの確保の周知を行いました。

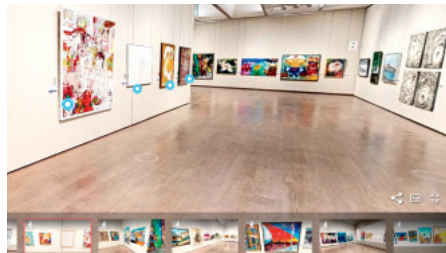
「3Dバーチャル美術展」の公開

新型コロナウイルス感染症の感染拡大及びDX推進の観点から、ぎふ美術展においては初めて、「3Dバーチャル美術展」を公式ホームページ上で公開しました。

これは、3Dバーチャル技術を活用して、パソコン、スマートフォン、タブレットなどの画面で、まるで自分が展覧会場の中を歩いて移動しているかのような目線で、いつでも、どこでも、どなたでも、4K相当の高画質の画像で作品を鑑賞していただけるコンテンツです。令和4年1月1日時点で6,244名の方にお楽しみいただいております。



3Dバーチャル美術展①



3Dバーチャル美術展②



3Dバーチャル美術展③



◎ぎふ美術展賞(各部門1点)

重要無形文化財「志野」保持者 鈴木藏氏制作 湯呑み



鈴木藏氏略歴

- 1934年 岐阜県土岐市に生まれる
- 1961年 第8回日本伝統工芸展 NHK会長賞受賞
現代日本陶芸展 朝日新聞社賞第一席受賞
- 1962年 ブラハ国際陶芸展 グランプリ受賞
- 1967年 第14回日本伝統工芸展 日本工芸会会長賞受賞
- 1968年 日本陶磁協会賞受賞('82年に金賞受賞)
- 1985年 個展「流転生」会席用食器揃一式を展示(菊池ゲストハウス・虎ノ門)
- 1987年 岐阜新聞文化賞受賞
芸術選奨文部大臣賞受賞
中日文化賞受賞
岐阜県芸術文化顕彰受賞
- 1988年 個展「水指展」(三越・東京日本橋)
- 1992年 日本の陶芸-『今』100選(NHK主催、三越エトワール・パリ、三越・東京日本橋)
藤原啓記念賞受賞
東海テレビ文化賞受賞
- 1994年 重要無形文化財「志野」の保持者に認定される
- 1995年 紫綬褒章受章
- 1998年 朝日新聞社主催「鈴木藏展」をパリ三越エトワールで開催、翌年帰国展(三越・東京日本橋/名古屋)
- 2001年 日本経済新聞社主催「志堇-人間国宝・鈴木藏展」(高島屋・東京日本橋/大阪/京都/横浜)
名古屋会場は日本経済新聞社・中日新聞社共催で松坂屋美術館で開催
- 2002年 「色絵磁器と志野の人間国宝 加藤土師萌、鈴木藏展」(香雪美術館・神戸市)
- 2005年 旭日中綬章受章
第1回現代の茶陶展 大賞受賞(菊池寛実記念 智美術館)
- 2009年 「不二の志堇-人間国宝・鈴木藏展」
(高島屋・東京日本橋/京都/米子/ジェイアール名古屋/大阪/岐阜/横浜)
- 2010年 第3回現代の茶陶展 優秀賞受賞(菊池寛実記念 智美術館)
「流転生-鈴木藏の志野」(菊池寛実記念 智美術館)
- 2018年 高島屋美術部創設110周年記念個展
(前期：東京日本橋/米子/京都/岐阜、後期：大阪、横浜、名古屋、岡山)
- 2020年～2021年 個展「造化にしたがひて、四時を友とす」(菊池寛実記念 智美術館)
- 2021年 個展「四時友遊 人間国宝 鈴木藏展」(三越・東京日本橋)
- 現在 日本工芸会正会員・参与

◎優秀賞(各部門2点)

岐阜県重要無形文化財「織部」保持者 玉置保夫氏制作 ぐい呑み



玉置保夫氏略歴

- 1941年 岐阜県多治見市に生まれる
- 1965年 第11回日本伝統工芸展 初入選(以後、入選多数)
- 1977年 東海伝統工芸展最高賞受賞(1984年も同賞を受賞)
- 1980年 日本陶磁協会賞受賞
- 1986年 第1回国際陶磁器展美濃 審査員特別賞受賞
- 1991年 岐阜県芸術文化活動等特別奨励賞受賞
- 1995年 多治見市芸術文化部門功労表彰受賞
- 1999年 第5回美濃陶芸庄六賞茶器展特別永年保存作品に選定
- 2002年 多治見市無形文化財「織部」保持者に認定
- 2008年 岐阜県無形文化財「織部」保持者に認定
- 2012年 岐阜県教育功労者表彰受賞
- 2015年 岐阜県各界功労者表彰受賞
- 2020年 旭日双光章受章
- 2021年 東海テレビ文化賞受賞
- 現在 日本工芸会正会員
(公社)日本工芸会東海支部参与
(公社)美濃陶芸協会顧問

清流の国ぎふ芸術祭運営委員会
委員名簿

役職	氏名	所属機関・団体役職
委員長	神戸 峰男	日本芸術院会員、名古屋芸術大学名誉教授
委員（五十音順）	臼井 千里	書家、岐阜県世界青年友の会常務理事
	角田 菜瑳子	児童文学作家
	加藤 幸兵衛	陶芸家
	桑原 鑛司	洋画家
	土屋 明之	岐阜県芸術文化会議会長
	仲居 宏二	元聖心女子大学教授
	日比野 克彦	岐阜県美術館館長
	廣瀬 輝	一般社団法人 中部地域づくり協会 理事長

ぎふ美術展企画委員会
委員名簿

役職	氏名	所属機関・団体役職
委員長	神戸 峰男	日本芸術院会員、名古屋芸術大学名誉教授
副委員長	桑原 鑛司	洋画家
委員（五十音順）	河西 栄二	岐阜大学教育学部教授
	鈴木 徹	陶芸家
	長谷川 喜久	日本画家、名古屋芸術大学教授
	古田 菜穂子	（公財）岐阜県教育文化財団文化芸術アドバイザー
	前田 真二郎	情報科学芸術大学院大学 [IAMAS] 教授
	横山 豊蘭	書道家、アーティスト、名古屋芸術大学非常勤講師

第3回ぎふ美術展を終えて

2018年度に旧来の「岐阜県美術展」から新たに生まれ変わ
り始まった「ぎふ美術展」も今回で3回目となりました。

第3回の開催にあたり、本展をより魅力的な展覧会にする
ため、企画委員会において丁寧な議論を重ねてまいりま
したが、最も重要視したのは、過去2回に引き続き、審査
員の選定でした。今回、県内外から過去最多となる991点
の応募をいただいたのも、各分野の第一線でご活躍されて
いる著名な審査員の方々のお力もあってのことと思います。

審査会においては、納得するまで何度も吟味して作品に
向き合い、熱心な議論により、入選作品を選定していただ
きました。審査員の方々からは、「作品のレベルが高く、バ
ラエティーにも富んでいる。」というご感想のほか、「展覧会
の方向性が素晴らしいので、今後更に発展してほしい。」と
いう激励のお言葉も頂戴しました。

また、会期中には審査員によるトークイベントや、部門別
の作品講評会を開催しました。トップアーティストや評論家

として活躍する審査員によるクロストークや、時には入選者
を交えながら行う作品講評会は、日ごろ制作に励む方はも
ちろん、美術に触れ合う機会の少ない方にとっても、芸術
に親しむきっかけとなったのではないかと思います。

さらに今回、新たな試みとして、「3Dバーチャル美術展」
を実施いたしました。実際の作品と触れ合うことに勝るもの
はありませんが、新型コロナウイルス感染症が世界的に広
まっている中であって、文化芸術の力を、そして、ぎふ美術
展の面白さを、多くの皆様にお伝えすることができたと思っ
ております。

この「ぎふ美術展」が、より多くの県民の皆様親しんで
いただける公募展として、この先も回を重ねながら末永く
発展していくことを願っています。

ぎふ美術展企画委員会委員長 神戸 峰男

清流の国ぎふ芸術祭
第3回ぎふ美術展

GIFU ART
EXHIBITION

発行年：令和4年2月発行

デザイン 滝川正弘・立花知子（有限会社クロス）
印刷 株式会社 山田写真製版所
撮影 Choice 宮川邦雄
編集・発行 岐阜県
公益財団法人岐阜県教育文化財団

本書掲載の肩書きは令和4年1月1日現在のものです。